

ムラサキイガイが着生したイワガニ

村 岡 健 作

Kensaku MURAOKA: Shore Crab, *Pachygrapsus crassipes*, Carrying Common Blue Mussel, *Mytilus edulis* on Its Abdomen

はじめに

イワガニは日本各地の岩礁海岸に生息するが、その中で、腹部にフクロムシが寄生している個体もみられる。これに寄生されたカニは寄生去勢や生殖巣の退化などの影響が体内外におこることが知られている。

今回、イワガニの腹部にフクロムシが寄生し、さらにムラサキイガイが着生した個体を採集することができた。これまでに、このような観察記録は少ないと思われるのでここに報告する。

結 果

ムラサキイガイが腹部に着生していたイワガニは神奈川県足柄下郡真鶴町岩の海岸で1992年7月16日に3個体採集した。

これらのカニの腹部の内側（腹甲を含む）に貝が足糸で着生していた。1個体に着生していた貝の個体数は20個体が最多であった（表1）。貝の大きさは、いずれも小型で占められていたが、その中で最大の貝は、殻長13.1mm、殻幅8.4mmであった。

これらのイワガニの計測値は次の通りである。

イワガニは満潮線近くの海岸にごく普通に見られる種類である。一方、ムラサキイガイは一般に内湾の岩、岸壁等に付着し生活している。この海岸でのムラサキイガイの生息個体数は、これまでさほど多くはなかった。この貝の増加が目だつようになったのは1989年秋頃である（種田、私信）。特に淡水や汚水が流れ込むような海岸域に顕著に見られることから、生息数の増減は陸水の流入量も少なからず影響しているものと考えられる。

このムラサキイガイの増加が顕著になるにつれて、フクロムシが寄生しているイワガニの腹部に、さらにムラサキイガイが付着した個体が見られるようになった。

イワガニと同科のイソガニでは、フクロムシが寄生した個体は、そのフクロムシの表面を人為的に汚すと、鉗を用いてクリーニングを行い、表面を常にきれいに保つことが知られている（高橋、1933）。今回の観察では、イワガニの腹部にムラサキイガイが足糸を用い

表1. イワガニの計測値

標本番号	性	甲幅 (mm)	甲長 (mm)	第4腹節幅 (mm)	貝の 着生個体数	備考
標本1	♂	24.8	21.4	12.6	11	腹部は雌化
標本2	♂	22.2	19.0	11.7	20	腹部は雌化
標本3	♀	22.2	19.3	13.4	7	



図1. ムラサキイガイを着生したイワガニ（雄）
上；背面， 下；腹面

て着生していた。本種がイソガニと同様な行動をとるとすれば、イワガニは鉗を用いて、この貝を払い落とすためのクリーニングを行うことができるのではと考える。

この調査では、貝が着生していたカニはいずれもフクロムシが寄生している種に限られていた。しかも背甲には着生せずに腹部のみであることから、この貝がなぜカニの腹部に着生するのか、またカニに払い落とされることはないのか。さらに、貝の成長とその着生

時期との関係など、不明なことが多く、今後も機会をみて調査をおこなって行きたいと考える。

文 献

高橋 徹・松浦修平, 1993. イソガニに寄生するフクロムシのEgg-mimicryについて. 日本甲殻類学会講演要旨.

(神奈川県立博物館)